



2022 年 (令和 4 年)

10 月号 (No. 929)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

津軽半島・算用師峠のことども 「全国山岳古道調査」に寄せて

東海支部 西山秀夫

「全国山岳古道調査」応援寄稿の第 2 弾。青森県・津軽半島に「みちのく松陰道」というトレイルが整備されている。幕末の思想家・吉田松陰が北方の防備状況を確かめるためにたどったのがその一部、算用師峠越えの道。菅江真澄や伊能忠敬、松浦武四郎らも越えた、この歴史の道を歩いた西山会員による調査レポート。

全国で 120 もの古道を選定する作業は、ほぼ終わった。個人的には山岳古道への関心は今に始まったことではなかった。30 年くらい前から愛知県、岐阜県の古書店を巡り、古雑誌や地域資料、歴史書、地誌などを収集してきた。蓄積があったから提案し、引き受けることができた。また『岳人』にも発表してきた(注)。

それでも、県外の会員から選定

峠名はアイヌ語起源か

平成から令和元年への御代替わりで得た 10 日間の休日を、全て青

目次

津軽半島・算用師峠のことども	1
「全国山岳古道調査」に寄せて … 1	
長野県小諸市で開催した第 11 回	
登山教室指導者養成講習会報告 … 4	
ヒマラヤ関係 2 つのプロジェクトを再開 … 6	
さんけん通信 … 7	
追悼 賛田統亜さんの思い出 … 8	
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
⑨ 金勝アルプス … 9	
⑩ 湖南アルプス … 10	
Climbing&Medicine ・ 90 … 12	
新入会員 … 12	
東西南北 … 13	
活動報告 山行委員会 … 14	
図書紹介 … 15	
会務報告 … 16	
ルーム日誌 … 16	
会員異動 … 17	
INFORMATION … 17	
編集後記 … 19	

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 … 10~20 時
水・金 … 13~20 時
第 2、第 4 土曜日 … 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 … 10~18 時

森県の山に費やした。そのなかでもとりわけ感動があったのである。当時の令和元年 5 月 1 日の記録から引いてみよう。

《令和元年をつつがなく迎えた。天気予報通り、霧の中にあり、よろしくない。津軽山地の大倉岳は明日にして、算用師峠に変更した。雨でも歩けるように考えてあった。吉田松陰が嘉永 5 (1852) 年に越えたというので「みちのく松陰道」として整備されている歴史の道である。

R 339 を走って、傾り石(かたがりいし)まで行くと案内が建っている。右折して林道に入る。奥へ行くほどに悪路になって心配になる。足元にはキケマンの花が群れ咲く。悪路をこなしてなんとか登山口にたどり着く。広い沢の出



傾り石に立つ「みちのく松陰道入口」の道標

合いである。『分水嶺辞典』によると、「算用師」とは、その名のとおり算術で生計を立てた職業の一つ。読み書きが普及していなかった江戸時代、村の算用を引き受けたそう。しかしながら、ここ算用師峠の名前



「奥津軽トレイル」にもなっている津軽森林軌道跡

の由来はこの職ではなく、アイヌ

語の「サニウシ」(sani-usi)であるという(江戸時代に東北を遊歴した文人・菅江真澄の日記に、古名が「さにうし」であることが記されている)。これは「昇り降りをする場所」という意味で、まさに峠口であるからこの名があつたのである。

このように、「東北にもアイヌ語の転化した地名が広く分布しているのだ。」とある。山田耕一郎著『青森県山岳風土記』の増川岳の項

休んで引き返す。

「みちのく松陰道」とは

江戸に留学中、ロシアの船が北方の海に出没することを知った吉田松陰は、その防備状況を確認するべく、脱藩覚悟で東北へ旅立った。嘉永4(1851)年の旧暦12月、弱冠22歳のときである。

翌年3月、彼は熊本藩士・宮部鼎蔵とともに津軽半島に達した。『東北遊日記』に「真に好風景なり」

には昔、三厩村にはアイヌがいた、と書いてあるので蓋然性は高い。

7時40分、登山口からゴム長を履いて歩き始めた。せせらぎのような穏やかな流れに沿う小径を歩く。一面が若葉青葉で覆い尽くされている。美しい。足元には山野草が絶えず出てくるから、飽きがない。枝沢を渡る際にはアップダウンがあるが、最後の徒渉を終えると後は峠に向かうのみとなる。8時50分、峠に着いた。峠で10分

と書かれているのは、中里の十三湖岸の景色のことだ。

3月5日、ふたりは小泊から海岸沿いに北上し、途中から山道に入る。当時、津軽藩は旅人がこの道を通ることを禁じて、道を造っていないかった。谷間を登り、膝まで水に漬かりながらあちら側、こちら側と沢を幾度も越えてようやく算用師峠の頂上に至る。嶺を下ると、二、三尺も雪が残っており、雪の中を歩き、さらに雪解け水が大流となっている川を何度も渡つて、「困苦太甚し」という苦行の末に、やっと三厩の海岸に出たという。

その途中、詩作している。「去年今日発巴城(去年の今日巴城を発し)……」で始まる詩文は、昭和41(1966)年、竜飛崎に建立された「吉田松陰 詩碑」に刻まれている(以下略)。出典・弘前国道維持事務所「幕末の志士が辿った「みちのく松陰道」」

菅江真澄や松浦武四郎も越えた峠

吉田松陰のみならず菅江真澄、伊能忠敬、松浦武四郎らがいた。菅江真澄は愛知県豊橋市の生まれ。宝暦4(1754)文政12(1800)18

29)年。姓は白井。幼名は英二、青年に達して秀雄、後年、菅江真澄と称した。天明2(1782)年に28歳で両親に別れを告げて家を出て以来、生涯をみちのくの旅に暮らした。その間、多くの紀行を残した。柳田国男は『柳田国男全集』3(ちくま文庫)に「菅江真澄の旅」としてまとめている。

津軽には三度来訪し、2回目の来訪は天明8(1788)年で、盛岡から狩場沢を通過し、北海道へ渡るため宇鉄(東津軽郡三厩村)から船で渡道した。

天明8(1788)年、35歳で蝦夷(現在の北海道)に渡った。副題に「率土が浜づたひ(秋五)」とある。現在の外ヶ浜である。

七・六 馬門の関を越えて津軽領に入る。狩場沢・口広・清水川 小湊にて関手形を取り土屋浦の関にその手形を檢めらる。櫛木坂を降りて浅虫の湯に泊る

七 うとうまえの掛け橋見物 野内・茶屋町・青森も過ぎて 大浜(東津軽郡・油川)に泊る 雨風のために滞在す 九 十三森・田沢・夏井田・瀬戸



イチリンソウの群落の中に立つ峠への道標

子・蓬田・蟹田を経て 野田に泊る

一〇 根岸・平舘・宇田・奥平部・母衣月・今別を経て 松が崎に泊る

一一 早朝に三厩の浦に着く 算用師・竈の沢などを過ぎ 上宇鉄に行きて渡海の便船を求む

一二 この夜便船ありて乗る 追手強く吹き 翌朝未明に松前の湊に到着す

(以下略)

このように難儀な蝦夷への旅の記録を残している。この記述から峠越えではなく、算用師の漁村を通過したのである。1788年7月13日であった。今から234年前のことだ。菅江真澄が再び津軽半島に行くのは、寛政8(1796)年の43歳のときだった。

「外浜奇勝秋六」の日記には、

六・二三 安部館の旧

跡を巡覽して、小

泊の湊に泊る

二四 七つの滝を一見

し 算用師越の近

くまで行きて引き

返し 小泊を過ぎ

て下枉(地名注し

したまえ)という

海端の僻村に行き

三泊す 附近の風

景を見て歩く

(以下略)

菅江真澄は再び秋田に戻り、文政12(1829)年に76歳で没した。秋田県仙北市角館

町の神明社には立派な「菅江真澄終焉の地」碑があり、秋田で大切にされていたことが分かる。筆者も

真澄ゆかりの太平山と森吉山の登山の帰途、お参りさせてもらった。

三重県松阪市出身の松浦武四郎(文化15(1818)年～明治21(1888)年)は、弘化元(1844)年9月28日に訪れている。26歳だった(『東奥沿海日誌』)。松浦武四郎『紀行集』上(富山房)の小泊湊から引く。

《燕岬なりとし、海上より磯船一艘大音声て我が方に漕来たりける故、何事也と立ち留りミければ岸に來り何国に行く人なりと云によりて、我ハ伊勢の国の修行者なるが此の海岸を廻らんと此の燕岬を一見に來と云ければ、扱それこそ命知らざる旅人哉と云て舟を出しけるに、(中略)》

実は、燕岬は地形図には燕崎が該当するのだろう。ここは観光が目的だったようだ。地形図を見ると、算用師峠へ行く傾り石沢出合から浜沿いは、崖の記号が連続している。そこで峠を越えて、東回りの竜飛岬経由で行ったというのだ。

239ページに来て、やっと「算

用石」の名称が出てくる。小泊カタカリ石か(現在の傾り石沢)。《此処へ山越え道四里半と云り。甚難所のよしきけり。また小石ゴロタ濱を暫く行きて。(後略)》

243ページには、三馬屋の項で《既とも書り。從小泊三算石算用師力越え六里半。海上にて八里といへり。竜飛より五里といへ共四里半位成るべし。(以下略)》

現在の地形図でも、国道339号は傾り石沢出合の先の海岸から津軽半島の脊梁に登るので、車では海岸沿いはたれない。今も秘境だろう。探検に近い旅だった。古道探索の魅力とは、ひとえにオデッセイ(知的探求)にあるのではないか。

今では役目を終えたが故に「古道」となり、標高も380mに満たない峠路だが、前述したとおり、先人の苦難と探求心の凝縮した道だと思った。

〔注〕『岳人』1998年5月号「若日のアルピニストがたどった峠道 伊那山脈小川路峠」(西山秀夫)

*引用した『柳田国男全集』2「東国古道記」の中に小川路峠、塩の道、伊勢神峠が少し書いてある。

長野県小諸市で開催した 第11回登山教室指導者養成講習会報告

支部事業委員会 中村哲也

主催…(公社)日本山岳会 支部事業委員会／後援…(公財)安藤スポーツ・食文化振興財団
9月17日(土)

会場…安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター カンファレンス・ホール

◆講義1 「最近の遭難事故と救助活動に学ぶ」石岡優士講師(長野県警察山岳遭難救助隊副隊長)

◆講義2 「登山のための健康トレーニング」齋藤繁講師(群馬大学附属病院院長)

◆講義3 「チームと自己を守るスキル」川瀬恵一講師(日本山岳会遭難対策委員会担当理事)

9月18日(日)

場所…安藤百福センター イベント広場周辺

◆実技実習 「セルフレスキュー」川瀬恵一講師(前出)

2月に開催の予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大により急遽中止となり、開催が危ぶま

れた。開催施設と協議の上、参加人数を制限して感染症対策を施し、小諸市において講習会を無事に開催することができた。

本講習会は、各支部の活性化と次期リーダーの育成を推進するための施策として計画され、今回で11回目。今回も安藤スポーツ・食文化振興財団の後援を受け、群馬(4名)、埼玉(1名)、千葉(4名)、神奈川(1名)、越後(4名)、山梨(2名)、京都・滋賀(2名)、広島(2名)の各支部より、44歳から71歳まで幅広く、女性4名、男性16名の20名が参加した。

日本山岳会の活性化・会員増強の方策として支部山行が準会員や山歴の若い会員の定着事業として注目されているが、山行の増加に伴い遭難事故の危険も増加している。また、地域の非会員を対象とした登山教室は新入会員の獲得に寄与することから、実施する支部も年々増えている。特に非会員を引率する場合には受講者の安全管理

理はより重要で、山行の安全管理に必要な知識と技術を持った指導者の養成が求められている。支部活動における問題として、指導者の不足を挙げる支部は多い。

そこで、支部事業委員会では登山の安全管理に必要な知識を持つ指導者の養成を通して支部の活性化に資するとともに、各地域において登山者が安全な登山ができるよう指導できる人材の育成を目的として、登山教室指導者養成講習会を実施してきた。

1日目は宮崎紘一・支部事業委員会委員長の挨拶と講習会開催の趣旨説明の後に3講義を実施した。講義1は、近年の山岳遭難事例を基に、実際の救助現場の画像を交えて山岳遭難の特徴を説明された。その原因の多くが人的要因によるもので、特に単独山行での遭難が一番多いこと、力量以上の山行で遭難があると示された。そのほかヘリで救助される場合、ヘッドライトでの合図が有効とのこと。講義2は、高齢者の遭難事故が増えているが、その原因は体力の衰えやバランス力の低下、持病の悪化などがあり、心肺機能の関わりなどからも対処方法を学んだ。

講義3は、事故発生時の全般的な対処方法から道迷い、危険動物遭遇時の対処方法まで学び、実技講習で使用するロープワークの復習をした。

2日目、実技講習「セルフレスキュー」は、室内で1時間ほど支点構築、ロープの設置方法を学んでから屋外で行なわれた。2名1チームの10チームに分かれて、危険箇所を安全に通過するため、立木に支点を構築し、ロープを設置してトラバースの通過を実際に行なうことを想定して、立木に支点構築し、ロープを設置して実際に急斜面を降りた。最後にスリリング



長野県警石岡副隊長による講義はリアルな映像とともに

1本を使用した背負い搬送方を学んだ。

今回、台風の影響で天候が危ぶまれたが、2日目の実技講習は外で行なえ、立木や斜面を利用し実戦的な講習会ができて有意義であった。コロナ禍で人数制限はあったが多くの支部から参加があり、安全登山について学習し、考える貴重な機会を持つことができた。各支部において今回学んだことを深め、安全登山に対する取り組みを行なうきっかけとなり、支部山行や登山教室が適切な安全管理の下で行なわれることを願っている。

指導者講習会を受講して

京都・滋賀支部 松下征悟

会場となる安藤百福センターが



川瀬講師によるセルフレスキューの実技講習

の道迷いの現場の写真や救助動画は、生々しく迫力があつた。登山に対する非日常のレジャーとしての魅力と認識の甘さについては、意識改革が必要である。登山は「レジャー」ではなく、リスクを回避しながら

見えたとき、思わず車を止めて写真を撮った。木を基調とした室内と浅間連峰を望む大きな窓、隈研吾さん設計の素敵な施設で過ごす2日間の講習会に心が躍った。

講習会は、長野県警察山岳遭難救助隊・石岡副隊長の講義から始まった。コロナ禍で変化した登山事情、予約制の山小屋、増えるテント泊、低山に登山者が集中、そして増える遭難件数、コロナ防護措置を取りながらの救助活動……。そんななか、「自己責任」ではなく「自己完結型」の登山を目指して欲しいと、石岡氏の強い願いのこもった言葉だった。

令和3年に、長野県内での交通事故死者数を山岳遭難死者数が上回ったことは、全国ニュースでも大きく取り上げられていた。実際の

ら目的の行動を完結する「冒険」だ、という石岡氏の言葉を広く伝えるとともに、私自身も事前準備をしつかり行ない、「入山前遭難」にならないように心がけたい。

続いて、齋藤氏による山登りと健康増進についての講義。呼吸法、エネルギー、脱水補正、心臓、筋肉、骨、バランス保持、加齢とともに低下する最大酸素消費量、健康管理と盛りだくさんな内容だった。いざというときの予備力が、中高年になると低下することを念頭に今後、日々の健康チェックと運動、継続的な記録を続けていこうと思った。

1日目最後の講義は、川瀬氏より翌日の実技講習に向けたロープワークを学んだ。レスキュー装備を使つてのダブルフィギュアエイトノットと、120cmスリングで作る簡易チェストハーネスの作り方を参加者全員で練習した。

講義の後は夕食をいただき、講師の方とともに楽しい交流の時を過ごした。

2日目、台風14号の接近で天候が心配されたが、フィールドに出て昨日の講義で学んだトラバースのシステムの実技を行なった。緊

急時にシステムの構築に時間を取られてはいけな。そのためには、実際にやってみることが大切だ。細いスリングをチェストハーネスとして使用すると、体に食い込んでしまった。緊急時に簡易チェストハーネスとしても使用できる太さのスリングが必要だということに、実際にやってみて気がついた。

また、体格や服装によつては120cmスリングでは短い場合があることも分かった。目的に合った装備であるかどうか、きちんと判断できるように今後も学びを深め続けたい。実際の現場は、モデルケースどおりとは限らない。このレスキュー装備をどのように使うのか、リーダーだけでなくチーム全員が共通理解していることが大切だと分かった。

この講習会で学んだことを、支部の行事等で多くの方に伝達するとともに、実技については、忘れないように繰り返し練習していこうと思う。

なかなか収束しないコロナ禍の下で、講習会を企画・運営いただいた方々に、この場をお借りして感謝を申し上げます。

創立120周年記念事業

ヒマラヤ関係2つのプロジェクトを再開

ヒマラヤキャンプへの
意気込み

ヒマラヤキャンプを始めたきっかけは、大学在学中に参加した2度のヒマラヤ登山にあります。所属していた信州大学山岳会のOBが組織する登山隊が、まだ経験が浅い現役学生も参加できるように、門戸を開けてくれたことで実現しました。

大学卒業後は日本山岳会東海支部隊にて、冬のローツェ南壁登山



ヒマラヤキャンプ2018 パンカール・ヒマール山頂に立つ

隊に参加しました。そこで「冬期」「8000m」「バリエーション・ルート」という、究極の世界を経験することができました。20代でこれらの経験ができたのは、私が優れたクライマーだったからではありません。あらゆる面において支援してくれた組織があり、そして、見守ってくれた先輩たちの存在があったからこそ実現しました。しかし、今の日本には、かつての私のような立場でヒマラヤ登山に挑戦できる「受け皿」がほとんどありません。そこで2015年にこのプロジェクトを立ち上げ、これまで3度にわたってネパール・ヒマラヤの未踏峰に赴き、実績を積み上げてきました。

歴史ある日本山岳会には、多くの先輩や仲間から継承できる登山文化があります。若手の活動をサポートし、日本山岳会が培ってきた登山文化を次の世代にリレーすることが、未来の登山文化の発展に寄与するのではないのでしょうか。コロナ禍によってしばらく海外

で活動しにくい状況でしたが、この秋から再スタートします。このプロジェクトから育った若手人材が、さらなる高みを目指す仕組みとなるよう、プロジェクトへのご支援をよろしく願ひ申し上げます。
(花谷泰広)

G・H・Tを踏査し、
ヒマラヤの今を知る

コロナ禍の中で実施した第1回は、2020年3月4日から4月18日にかけてカンチェンジュンガ南面と北面を踏査しました。踏査中にロックダウンが始まり、2日間に63回もの検問を受けてカトマंडゥに戻ることはできませんでした。

今秋、やっと2回目実施の目途がついて、10月1日に成田空港を出発します。今回は、青木文教が1912(大正元年)、ダーズリンからオランチュンゴラを経てラサに向かった国境の峠、ティプタラ(5096m)を踏査の後、ルンバサンバ山群を越えてマカルー・エリアに至り、3つのコルを越えてチュクンに下る行程になります。昨今の地球温暖化による氷河湖決壊洪水の発生や、チベットから



ナンガマリ(2016年)からマカルー～チョモランマを遠望する

の南下道(6ヶ所)の延伸などで、ネパール国境の高地村落にも社会的変化が起きつつあります。また、コロナ禍の1年半の間に世界情勢は大きく変化し、急激な円安とそれに伴う物価・人件費の高騰に翻弄されており、引き続き会員の皆様方のご支援、ご声援をお願いいたします。

同時期に、東海支部会員のマナスル単独登頂、広島支部の若手会員によるアマ・ダブラム登山なども実施中で、ヒマラヤキャンプをはじめ日本山岳会の若者たちのヒマラヤ登山への新たな胎動に、応援をいただければ幸いです。

(重廣恒夫)

●ヒマラヤキャンプ隊は10月11日、プンギ初登頂に向けBCを建設しました。

●G・H・T踏査隊は10月13日、オランチュンゴラを出発しました。

さんけん通信

山下まり子委員の霊、安らかに

山岳研究所運営委員会 柴山信夫

本会会員であり、山研委員でもある山下まり子さんが7月下旬に剱岳山中で遭難し、お亡くなりになられました。東京の会社員女性の行方不明を報じるネットのニュースの一報に山下さんの名前を認め、無事の発見・救出を願っておりましたが、大変残念な結果となりました。ここに謹んで冥福をお祈り申し上げます。

山下さんは、山研委員会には私が委員長を務めていた2009年の6月に、委員補として仲間入りされました。信濃支部のご協力の下、当委員会では毎年実施している「徳本峠越えとウェストン祭」の企



在りし日の山下まり子会員

リゾート・ホテル関係の会社にお勤めということで、土曜・休日を中心の山研の開所・閉所作業や徳本峠越えなどのイベントには参加できないことが多かったのですが、その分、平日に休めないほかの委員に代わり夜行バスで頻りに山研まで足を運んでは、清掃や利用者対応など三代にわたる管理人の

サポートにも尽力してくれました。ご家族思いの山下さんは、ときにはご両親をお連れになって山研に宿泊し、上高地を案内することもありました。お母さまお勤めのお掃除便利グッズをいつも携えて来てくださり、その使い方をまるで親子漫才のように楽しく語る様子は本当に微笑ましく、管理人にとっても心暖むひとときだったそうです。

また、上高地で得た情報や新たな発見をお伝えすべく、山研のパソコンに向かう姿もよく見られました。ブログへの投稿を通じて山研はもとより上高地の施設や周辺の山域の魅力、山研利用者との交流などをレポート形式で発信し、PRに努めてくれました。

委員補として仲間入りされて以来、自らを「見習い山研委員の山下」とか「幽霊山研委員の山下」などと謙遜し、最後まで改めることはありませんでしたが、誰よりも山研を思い、自分が委員としてできることに一生懸命に取り組んでくれたと思います。

遭難される直前の7月初旬にも山研に宿泊されたようですが、上高地入りの際は登山用具一式を持

参し、山研をベースに周辺の山々への登山も楽しまれていたようです。「今は岩が楽しくて仕方ないんです」と、もっぱら岩場へ向かうことが多く、特に好んで登られた明神岳主稜・前穂高岳の縦走、焼岳・西穂高岳縦走、ジャンダルムへの初チャレンジなどの記録が、写真とともにブログに残されています。常に控えて謙虚な女性でしたが、その心の内にはひとつかたならぬ山への情熱を秘めていたことがうかがえます。

大切な仲間がこのような形で失われ残念でありませんが、彼女は今も大好きな北アルプスの山々を渡り歩いていることでしょう。どうか山下委員には、遠くの空から皆の安全を見守っていただきたいと思っています。



山下会員が立ち上げた「さんけんブログ」

追

OBITUARY

悼



賛田統亜さんの思い出

藤大路美興

賑やかなことが大好きだった賛田先輩は、日本山岳会と学習院山桜会の集まりを大切にされていた。

1972年5月、現役の山行計画検討会に、転勤先の名古屋から戻られた賛田先輩が参加との情報に、上級生はもちろんだが若手の先輩方にも緊張感が走ったように記憶する。「鬼」と冠の付く賛田先輩の最初の印象は決して鬼ではなく、明るく元気があり、面倒見と気前のいい先輩であった。



賛田統亜(にえだ・むねつぐ)

会員番号6497

1939年7月13日 東京都世田谷区に生まれ、都立青山高校山岳部並びに学習院輔仁会大学山岳部で活躍する
1968年 日本山岳会に入会。紹介者は松方三郎、加藤泰安
1967年 ヒンズー・ラジのゴラッシュ・ゾム初登頂
1976年 登攀隊長としてカラコルムのスキャン・カンリ初登頂に導く
2003年 日本山岳会理事に就任
2005年 同常務理事に就任
2008年 学習院山櫻会会長に就任
2011年 日本山岳会評議員に就任
2022年8月8日 逝去、享年83

大学山岳部全盛のころに在籍だったので、いろいろな武勇伝を聞き及ぶが、国内では同期の八木実さんと1961年8月29日に、錫杖岳の東尾根・南支稜側壁を初登攀した実力派である。

学習院が出遅れぎみのヒマラヤ遠征にも本格的に目指すべく、1966年にヒマラヤ研究会が発足したが、当時を知るヒマ研メンバーは、「極めて低調であった」ときつい評価をしている。そんな状況にありながらも、先輩はコッコツと前に進めていたようだ。

登山許可が厳しかったパキスタ

ンのカラコルムを目指していたが、ヒンズー・クシュとヒンズー・ラジは解放されていた。研究会のメンバーが1人、2人と脱落するなかで、最後は1人でも行こうと考えていたようだ。最終的には、現役学生2名を連れて、ヒンズー・ラジのゴラッシュ・ゴルの源頭にある6149m峰に初登頂し、ゴラッシュ・ゾムと命名している。

登山エリアはアフガニスタンのワハン回廊に近く、探検的にも魅力ある地域で、唐の高仙芝將軍が越えたとされるダルコット峠に足を延ばしたが、残念ながら民兵に行く手を遮られている。しかし、下山路ートは入山路ートと変えて、サージナリー・アン(4259m)を越えてリッチコー川沿いにチトラルに戻っている。このルートを選んだ理由は、当初計画していたヒンズー・クシュのルンコー・イ・ドサレ(6902m)を北側に望むことができるからだろう。

1974年、小生が4年生のとき、72年のニクソン・ショックの円高で、学生でも海外登山の計画が立てやすくなった。身近な先輩方も学生時代にアラスカやカナダの山々に行かれていたので、夏合

宿にカナディアン・ロッキーを計画し、OB検討会に諮った。

スムーズに通るかと思ったら、賛田さんをはじめとした「ヒマ研」のメンバーが、「カナダはなく、カラコルムのスキャン・カンリ(7544m)の偵察に行つて来い」と厳命された。社会人2年目の飯塚さんを誘ってコンコルディアを目指したが、現地の事情でスコロ・ラ越えに終わった。スキャン・カンリは「ヒマ研」でも対象としており、賛田さんの指示で、木下是雄先生のバルトロ・カンリを手本に、遠征計画書を作成した。

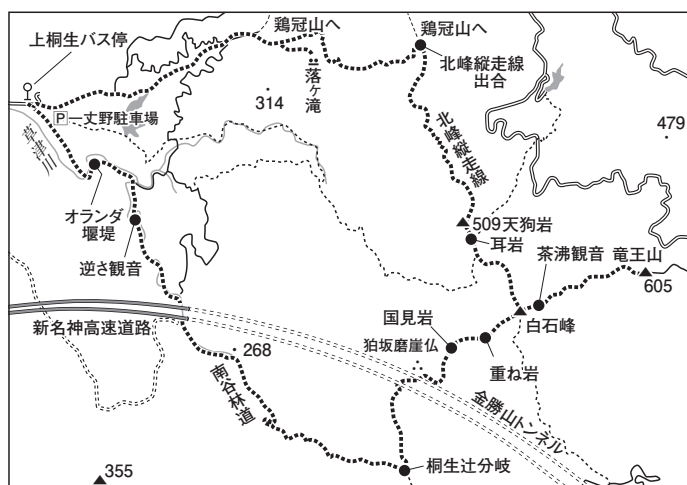
1975年12月、スキャン・カンリの許可が下りて、翌年の5月、出発に向けて賛田登攀隊長の指示の下、大車輪で動き始めた。登攀隊長は、隊員間のコミュニケーション醸成とタクティクスに意を用いられ、無事に初登頂に導かれた。

晩年まで山櫻会と山岳部の海外遠征の支援をされ、日常的に現役の面倒をよく見ておられた。人を集めて賑やかに過ごすことが好きだった賛田さんは、天国でも諸先輩を集め、下界の我々を温かく、厳しく見守つておられると思いたい。

合掌。

金勝アルプス

「金勝アルプス」は滋賀県の湖南エリア、栗東市と大津市にまたがる山々で、竜王山（605m）と鶏冠山（491m）を含め総称して金勝山系または金勝アルプスと呼ぶ。なお、その範囲は林野庁が選定・提供している「レクリエーションの森」の一つである「近江湖南ア



京都・滋賀支部 笠谷 茂

ルプス自然休養林」とオーバークップする。

稜線には風化した花崗岩がつくり出す独特の巨岩、奇岩があり、琵琶湖を取り巻くすばらしい眺望が楽しめる。お勧めの季節は春と秋。山域には奈良時代に開基し、平安時代の仏教文化の一翼を担っていた金勝寺や、奈良時代後

期に作られたと言われる狛坂磨崖仏をはじめとした遺跡が残る。一方、森林伐採により江戸時代には全国的に知られる禿げ山となったが、明治以降の治山工事・山復工等により森林が再生している。

本稿では、一丈野駐車場（登山口）を起点に落ヶ滝を経由、北峰縦走線（鶏冠山と竜王山を結ぶ縦走路）で竜王山に登り、狛坂磨崖仏を巡る周回コースを紹介する。

【コースガイド】

草津川の堤防上の車道の

終点に上桐生バス停がある。ここから林の中に続く林道のすぐ左手が登山口である一丈野駐車場だ。

東（鶏冠山方向）に延びる舗装された北谷林道に入り、最初の分岐で右側の真砂土の道に進む。小さな切り通しを越え進むと落ヶ滝へ続く沢に出るので、上流に向かう。鶏冠山分岐で本流を左岸に渡って花崗岩の斜面を越え、本流を右岸に戻ると落ヶ滝分岐だ。ここから滝を往復する。沢を渡り左岸を進むと落差20mの落ヶ滝が現われる。

分岐に戻り、右岸から大きく滝を高巻く。ザレた花崗岩の急登後、滝の上部に降りると石積み堰堤と堆積砂がつくる段々状の明るい河原歩きが続く。沢の中の歩行や補助ロープ付きの斜面登高がある。また、枝沢の合流点ではルートを外さないように注意が必要だ。シダが道にかぶさっていると、稜線上の北峰縦走線出合に着く。

縦走線を天狗岩に向かい右（南）へ進む。尾根芯の道に立つと両側の傾斜地に治山のための階段状の切り込みや、そこに植えられた植栽に山腹工の跡を見ることができ。高度を上げ、露岩が現われると一気に展望が広がる。天狗岩手



国見岩からの北望。中央が鶏冠山、右遠方が三上山

前でいったん尾根から外れ東側の沢筋に入って登り返すと、ベンチがある休憩ポイントとなっている。補助ロープが掛かる背後の岩を登った先に天狗岩が鎮座している。ここ天狗岩からの展望は見事である。

耳岩に向け縦走線を進む。ここでも東へ迂回して沢筋に入り、水が削った溝を抜けると天狗岩や鶏冠山を眼下に望める展望台がある耳岩に着く。再び縦走線を進むと稜線が分岐する白石峰だ。

竜王山に向け縦走線を東に進む歩き始めてすぐに、道の北側にアーチ形の石塔竪に掘られた茶沸観音がある。さらに尾根を進むと「八



すっかり周りの風景に馴染んだオランダ堰堤

大龍王」が鎮座する竜王山頂上分岐があり、目の前が四等三角点(点名・竜王山)のある竜王山山頂だ。北側(三上山(近江富士)方向)に展望がある。

白石峰まで往路を戻り、狛坂線に入る。重ね岩を過ぎた先に今回のルートでは最後のビューポイント・国見岩がある。南西の湖南アルプス・太神山から北北東の三上山まで遮るものはない。コースに戻り、西側の沢筋を降りると狛坂摩崖仏(国指定史跡)に着く。高さ約7m、幅約3mの花崗岩に阿弥陀三尊と、ほかに12体の仏像が刻まれている。

沢筋を下り、桐生辻分岐で上桐

生バス停に向け右(西)へ曲がり、歩道に進化した南谷林道を下る。新名神高速道路のアンダーパスを

抜け川に沿った南谷林道をそのまま進むと、流れに馴染んだオランダ堰堤が優雅な姿で現われる。オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケの指導により明治22(1889)年完成と言われるこの堰堤は、この山域を象徴する構造物だ。

「桐生若人の広場」の教育キャンプ場のかたわらを過ぎると、一丈野駐車場に戻る。

【コースタイム】上桐生バス停(50分)落ヶ滝(40分)北峰縦走線出合(45分)天狗岩(20分)耳岩(20分)白石峰(15分)竜王山(15分)白石峰(25分)狛坂摩崖仏(1時間)オランダ堰堤(10分)上桐生バス停 合計6時間

【入・下山口へのアクセス】JR東海道本線草津駅東口から帝産湖南交通バス「桐生線」に乗車、終点「上桐生」バス停下車(所要30分)マイカーの場合、「一丈野駐車場」(有料)を利用。

【参考文献】分県登山ガイド『滋賀県の山』(山と溪谷社) 林野庁、近江湖南アルプス自然休養林関連ホームページ

連載■ご当地アルプス登山案内20 湖南アルプス

「湖南アルプス」は滋賀県大津市の南東端に位置する山々で、瀬田川支流の大戸川、天神川、信楽川に挟まれた山地のことを田上山系または湖南アルプスと呼ぶ(広義には金勝山系を含む場合もある)。

花崗岩が露出した山並み、展望ポイント、真砂土の水辺など見どころが多く、一年を通して楽しむことができる。主峰の太神山(600m)はご神体山として崇められ、不動寺本堂への参道のたたずまいにも信仰の深さを感じる。

この山系は古来、大木が生い茂る森林だったが、都や寺院の建築用材を伐り出す^{そまやま}杣山となり、森林伐採により江戸時代には禿山となり、砂の流出は甚大な被害をもたらした。明治以降の治山工事・山復工等により森林が再生している。明治期には花崗岩鉱物の産地として名を馳せたほか、日本最大の隕石が明治18(1885)年ごろに発見されたのも、禿山であったこの山域だ。

本稿では、湖南アルプス登山口

京都・滋賀支部 笠谷茂

を起点に太神山から矢筈ヶ岳、さらに好展望の笹間ヶ岳を巡る周回コースを紹介する。

【コースガイド】

アルプス登山口バス停を出ると不動寺への参道でもあり、石灯籠が迎えてくれる。新名神高速道路の橋脚(建設中)の下を通過し、天神川に沿って舗装された林道(県道不動寺本堂線)進む。富川道の分岐を過ぎしばらく行くと「迎不動」に着く。林道は本流の堰堤を高巻



琵琶湖畔・なぎさ公園から見た湖南アルプスの山並み



くため左に曲がる。車止めゲートを越えて上部へ進むと、右側に参道の分岐がある。

真砂土の参道を進むとすぐに不動橋。この先から花崗岩の急坂でS字カーブを繰り返す。稜線に出ると休憩ができるお堂「中不動」がある。やがて「泣不動」が現われ、左に曲がると木の間から双耳峰の矢

筈ヶ岳が見える。

矢筈ヶ岳分岐を過ぎると「二尊門」に近い。温和な表情の石像が立つ二尊門を通り、進むと不動寺(寺務所に着く。不動寺は天台寺門宗に属し平安時代初期、智証大師円珍が創建。南北朝時代に再建された巨大な花崗岩の上に建つ懸崖造りの本堂は、大正13(1924)年

に重要文化財に指定されている。本堂の先の大岩を越えると、奥の院が見えてくる。その手前に太神山の二等三角点(点名:不動山)があるが、展望はない。

往路を矢筈ヶ岳分岐まで戻る。分岐から左(南西)側へ枝尾根を下る。沢を越え主稜線上のピーク(472m)に取り付く。この辺りは枝道が多く存在するので注意を要する。出合峠からの急登が終わると北西方向の展望が開け、尾根沿いに進むと木々に囲まれた矢筈ヶ岳(562m)頂上だ。出合峠に戻り御仏河原に向けて進むと、階段状に段々に削った斜面への植栽、石積みの斜面、階段等の山

復工(治山・植林)の跡を見ることが出来る。足元にシダが現われ、水の流れに合流すると御仏河原の上部(富川道分岐)だ。左(南西)へ沢に沿って進む、主稜線の小さな鞍部を越えると池塘が現われる。3つ目の大きな池を過ぎ、枝尾根の鞍部を越えると真砂土が堆積した大谷河原だ。北西方向から合流する沢沿いの道に入り、笹間ヶ岳への主稜線に取り付く。やがて舗装道(笹間ヶ岳材料運搬道路)に出て、尾根に沿って登山道を進むと山頂は近い。

笹間ヶ岳山頂には八畳岩という岩座が鎮座しており、三等三角点(点名:権現山、433m)は背後に位置する。八畳岩からの眺望はすばらしく、大津市街地と琵琶湖を囲む山々を一望できる。岩座の正面にある白山権現の祠の前を通り、急峻な登山道を下り権現社の鳥居をくぐると舗装道に交わる。新名神高速道路建設現場は工事用道路と笹間ヶ岳材料運搬道路の共用区間となっており、歩行者も通行できる。住宅地手前で工事用道路と分岐し天神川へ出る。上流側に進み、橋を渡るとバス停だ。【コースタイム】アルプス登山口



巨大な花崗岩の上に建つ懸崖造りが特徴的な不動寺本堂

バス停(20分)富川道分岐(15分)泣不動(1時間5分)矢筈ヶ岳分岐(35分)太神山(35分)矢筈ヶ岳分岐(30分)出合峠(10分)矢筈ヶ岳(10分)出合峠(40分)御仏河原(15分)大谷河原(50分)笹間ヶ岳(1時間)アルプス登山口バス停 合計6時間25分

【入・下山口へのアクセス】JR石山駅、京阪電鉄石山駅から帝産湖南交通バス「アルプス登山口行き」終点で下車(所要30分)

【参考文献】分県登山ガイド『滋賀県の山』瀬田川流域観光協会ホームページJAPANGEOGRAPHIC: 滋賀県大津市不動寺、オランダ堰堤、鎧堰堤ほか

Climbing&Medicine・90

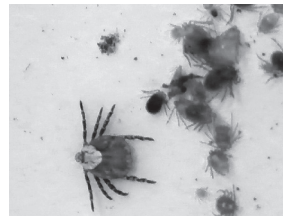
微小の吸血昆虫マダニの被害を防ぐ

医療委員会 秦 和寿

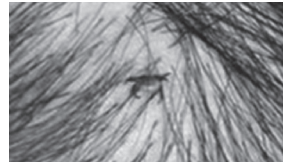
近年、山地でマダニが増加している。ニホンジカなど野生動物の増殖などと深い関連がある。また、山地では植林されたスギやヒノキの大規模伐採も影響を及ぼす。同地は再び広葉樹などの苗が植林されている。陽の当たる跡地は草原様となり、シカだけでなくノウサギ類も多発している。これらから哺乳動物に寄生するマダニも増加する。伐採地を歩く登山者はお分りのことだろう。

東京・景信山周辺でマダニの調査をしたので概要を報告し、併せて防除法を記す。

- ・ **調査場所** 東京・景信山周辺の林道の草叢 1 km。調査地点の高度約400m
- ・ **期日** 令和4年4月23日
- ・ **調査方法** マダニ採取の定法〈旗ずり法〉白色ネル布 1 m×1 m 林縁の草類上を白布で引きずり、付着したマダニをサンプル管に収納。
- ・ **マダニの捕獲状況** 種類＝タカサゴキラマダニ 1 匹成虫 (体長5.5mm) キチマダニ類 33 匹成虫 (体長 1mm)
- ・ **結論** タカサゴキラマダニは大型のマダニで、SFTS (重症熱性血小板減少症候群) などを媒介する。このウイルスを保有しているのは数千匹に 1 匹程度なので、人に寄生したからといって全て感染するわけではない。静岡以西は注意を



採集したマダニ 左に大きなタカサゴキラマダニ、右に複数のキチマダニ類



沢から帰宅後に頭皮にマダニが付着しているのを発見し、医療機関で摘出した

(写真提供:野口いつみ)

要する。

- ・ **山でのマダニ防止法** 低山はハイカーも多く、山道を歩いている分にはマダニの寄生はほとんどない。ところが、草叢に座ったり、撮影や植物や野鳥観察でヤブの中に入ると付着の恐れがある。寄生例が多いのは沢登り後のヤブこぎだ。
 - ・ **予防方法** 長袖・長ズボン・帽子・スパッツ着用で皮膚を露出させない。ヤブの中へ長時間入ったら風呂で腹部や腿など身体を点検する。
 - ・ **寄生を認めた場合** 無理やり引っ張ると口器の先端部(口下片)が皮膚内に残り、腫瘤(肉芽)などを起こす場合がある。マダニを確認したらワセリンを虫に隙間なく塗り、覆う。呼吸をできなくさせて自ら離れるのを期待する。それでも取れなかったら皮膚科を受診。発熱や皮膚に大きな紅斑が出たときは治療を要する。
- なお、マダニの採集に当たり、高尾の森づくりの会・松川征夫氏(日本山岳会会員)より調査に対しての協力を得た。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

東西南北

N

S

山の遭難を憂う「秋の山は怖い」遭難防止に先人の教えを想う

小原茂延

私が登山を始めた1960年代は、マナスル初登頂から続く登山ブームであった。しかし一方で、かの大島亮吉が「近くてよき山」と評した谷川岳が遭難事故多発に伴い「魔の山」と呼ばれるなど、社会的に問題視もされていた時代であった。当時の私は山へ行く旅費をアルバイト代で確保するのに精一杯で、ガイドブックのほかに本を買う余裕はほとんどなかったのだが、山の遭難を認識するべく、春日俊吉著の山岳遭難に関する本を買って読んでみた。

「岩木山」や「那須三本槍岳」ほかの遭難事例を読み、心構えを新たにしたい記憶がある。若くして殊勝なと思いきや、山岳部の仲間2人

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

を誘って、南ア北部の甲斐駒・仙丈・北岳を夏休みに歩いた際にさっそう、遭難一步手前の憂き目にあっている。両俣小屋から北岳山頂に至ったところ雨が降り出し、たまたま先行していた社会人パーティの後について白根御池小屋への道をたどっているうちに迷ってしまった。気が付けば尾根を大分下った場所で、登山道から外れているのは明らかだったが、経験の浅い我々はナタ目があるから大丈夫などと言い、迷った場所に戻るのを逡巡（しんじゆん）していた。

結局、北岳山頂まで引き返し、北岳石室小屋を目指して事なきを得た。そのとき、小屋でいただいた一杯の熱い緑茶で生き返った思いは終生忘れ得ぬ体験であり、高山とはいえ夏山にしてこの危険が起こり得ることを実感した。

最近の山雑誌の書評にあった羽根田治著の『山はおそろしい』のタ

イトルには感心した。普通には避けるであろう、つまり売れ行きにも影響しそうな「山はおそろしい」を題として選ぶには相当の覚悟であったと推察する。このような表題を付けねばならないほどの現状かとの思いに愕然とする。それゆえ、登山を始めた初心者、あるいは仕事で一時中断し山を再開した人たちにはぜひ読んでいただき、山という自然界の怖さを改めて知ってほしいと思う。

かつて山を始めたころ、山の雑誌が先輩の忠告だったか、「秋の山は怖い（おそろい）」と読んだか聞かされた記憶がある。夏の山と違って、秋の山は突然冬の様相を呈する、牙を剥くといった気象の急変による遭難があり、ベテランといえども軽視して遭難した例は数多い。

先人曰く、横有恒は著書『山の心』で山の安全は「己の力量を超える行動をしないこと、それには容易なものから順を追って程度を高め、いつも余裕を持って無理をしない事」、また、さらに先達の岡野金次郎は「一人で山へ行くな、たとえ低い山でも必ず二人で行け」「山道に迷ったらすぐ引き返せ」と

いった教訓を残している。

昨秋の山雑誌に野村仁氏が奥武蔵・奥秩父遭難発生マップとして近年の遭難事例、発生場所、態様などをまとめて報告（県警資料による）している。孫子の兵法ではないが、「彼を知り己を知れば百戦殆（あや）うからず」は登山の安全確保においても肝要である。

山岳スポーツといった観点からすれば、体育授業の一環に登山の基本を教える必要がある時代として発想するべきことで、遅きに失していると言ふべきかもしれない。

（埼玉支部）

想い出の分水嶺を行く

佐々木民秀

奥羽山脈の秋田県と岩手県の県境上に女神山（955m）がある。

この山への登山道が2年ほど前に六郷温泉あったか山側から整備されていたが（のちのツルコース）、昨年、地元山岳会などの協力力で新たに黒森峠側からも土手森（740m）を経由して切り開かれた。

これによって、和賀岳・真昼岳・女神山・黒森峠への縦走路が、

一部ヤブ化が進んでいる所もあるが可能となった。

この新しく切り開かれた縦走路を元支部長・今野昌雄、前支部長・鈴木裕子、それと小生を含めた秋田支部員5名(平均年齢81歳)が快晴の下、黒森峠側の登山口から女神山への岩手県側コースとの合流地点・白糸の滝分岐まで行ってみた。

思い起こせばこの縦走路は、日本山岳会創立百周年記念事業の一環として実施された日本列島中央分水嶺踏査の際、秋田支部が担当した、白地山から軍沢岳間の全区間260kmの一部であり、最後に残されたヤブこぎのルートであった。

平成18年6月29日、ヤブを切り抜け、岩手県側のコースとの合流点に飛び出て、岩手支部長・菊池修身氏の出迎えを受け、担当した秋田県の水嶺を無事に終了した安堵感など、あの日の感動に想いを募らせていただいた。

帰途は、途中の県境分岐からカナクラ分岐を経て、女神山と七滝山(愛称・秋田女神)の展望地・熊見平(662m)を経由して、六郷温泉側の登山口に無事下山。途中、

近ごろでは大変珍しいシシダケの大株を採取するなど、周遊7時間



山行委員会

念願の梅海新道を歩く

かつて北アルプスは朝日岳から蓮華温泉に下る分岐点、吹上のコルが北限だった。そこから親不知海岸まで27kmにわたる梅海新道を完成させたのは糸魚川市にあるデシカ(株)の技術者でもあった小野健氏(1932〜2014年)であり、氏設立のさわがに山岳会である(5年かけて1971年6月開通)。以前から「いつか行きたい」と思っていた私は、本部の山行委員会によるこの企画(8月26〜29日)に運良く参加できた。

集まったメンバーは北海道から2名、首都圏から5名、そして、静岡から私の8名だ。リーダーの数見直さんは新ハイキングクラブの

の記憶に残る山行となった。(会
員番号5748) (秋田支部)



日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

会長でもあり、SLの杉崎敬子さんは同クラブのリーダー。常本良一さんは9年前にここを踏破済み。旧知の野口いづみさんは医師。ほかに谷口美咲さん、高橋あかねさん、三井賢治さんとベテランぞろいだった。

初日は白馬大雪溪を登って白馬山荘泊。葱平に現われたオコジョが愛らしい。2日目は雪倉岳を経由して朝日小屋泊だった。設備も食事も評判通りの良い小屋だった。ここで梅海岳友会前会長でもある越後支部の蘆本修一さんに出会い、新道整備の苦労話や翌日からの注意点を伺うことができた(会報「山」915号に蘆本さんの記事が出ていたのを下山後知った)。

3日目は小雨の中、朝日岳を越え、いよいよ梅海新道に踏み出す。



朝日岳を下ると梅海新道入り口とも言うべき吹上のコルに着く

新道の名の由来となったコメツガの木々が深い。林を抜けると池が点在し、ここに書き切れないほどの花が咲き乱れる草原や湿原が続く。黒岩山、サワガニ山を越え、北又の水場で水を汲んで犬ヶ岳に至り、小野さんたちが建てた梅海山荘に着いた。10時間を超える長丁場だった。

最終4日目は晴天に明けた。来し方や遠く剣岳まで見える。この日も長く、白鳥山や尻高山を経由して午後4時過ぎによりやく親不知の海岸に達した。6名はここでさらに1泊し、翌朝解散となった。梅海新道は「巻き道は雪害に弱い」という小野氏の強い信念で飽



白鳥小屋(白鳥山)での記念撮影

くまでも稜線を行く。そのためアップダウンが激しく、ロープや階段が随所に出てくる。今回は白馬岳から入ったので3泊4日だったが、梶海新道だけなら1日短縮できる。としても、長丁場を覚悟せねばならない。海拔0mから始める逆コースは体力と精神力が試される厳しい道程となるだろう。

改めてこの道の開祖、小野健さんとその仲間、さらに小野さんの遺志を継いで維持整備を続ける方々に畏敬の念を表したい。なお、国立公園に含まれる朝日岳・黒岩山間は2007年以降、環境省が整備しているようだ。

(静岡支部・諏訪部豊)

日本スポーツ振興センター編

新・高みへのステップ 国立登山研修所テキスト



2022年3月
日本スポーツ振興センター登山研修所
A4判 第1部=226頁
2510円(税、手数料込み)

登山の形態は、多種多様である。山岳会などで企画する集団登山はもちろんのこと、単独で歩く者もあれば、家族や気の合う仲間との小グループで歩く者、学生時代に山岳部やワンダーフォーゲル部に所属して、技術はもちろんのこと、絆を深めた経験のある者も多くいるだろうし、幼稚園や学校の遠足や林間学校では全員参加で登山に挑戦する。

このように、歩き方には様々な形態があるが、単独行の場合を除けば、規模の大小はあるものの

図書紹介



「集団行動」であり、メンバーの中にリーダー的な存在が必要となる。リーダーには、技術やマナー、緊急時の対策方法の習得が求められるし、単独行だとしても、これが欠けていたら、ほかの登山者に迷惑をかけるばかりでなく、自身の身にも危険をもたらすだろう。

本書は、「国立登山研修所」における研修会のテキストで、主に山岳部の顧問などの指導者向けに書かれてはいるが、後述する山にまつわる様々な分野について、それぞれの専門家の立場から詳しくまとめられており、各章の終りには「演習問題」が掲載されていて、知識の理解度を確認できることから、山の志す者にとって有意義な内容である。今回、第1巻から第3巻までが全面改訂されたので、その内容を紹介する。

第1部 「登山の基本的知識」

第2部 「登山と自然」

第3部 「登山の基本的技術」

現時点で以上の3巻が発行されており、残りの第4部、第5部も令和5年3月に発行予定である。書籍版のほか、国立登山研修所のホームページから登録(無料)すれば、デジタルブックを無料で閲覧することができる。https://www.jpns-port.go.jp/tozanken/home/tab-id/213/Default.aspx (2022年8月21日現在)。書籍版は、書店での取り扱いはなく、同研修所のホームページから注文・購入することができ。

第1部の内容は、指導者、リ

ダー論、登山の魅力やマナー、登山計画の作り方、運動生理学とトレーニング学、研修会の運営方法。第2部は、登山の歴史と文学、動物・植物、地学・天文、気象、雪氷。第3部は、装備の基本と食料計画、無雪期の歩行技術、積雪期の歩行技術、生活技術、地図とナビゲーション。このように、内容は多岐にわたっており、人文、自然科学、医学、運動科学など様々な視点から登山に必要な知識を述べている学際的なテキストである。

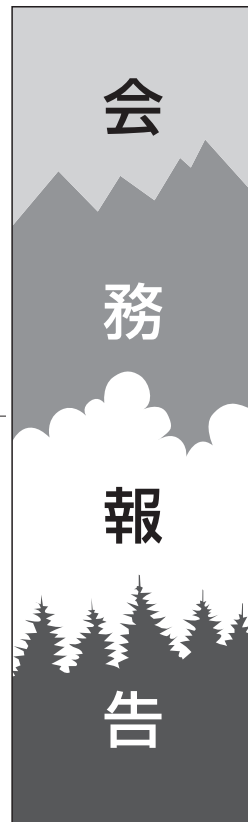
登山を志すに当たって、我が国の登山の歴史を知り、山に行つて得られるものは何かを知り、山で見られる動植物に関する知識を深める。さらに、家を出てから帰宅するまで安全に行動できるように、装備、歩行技術、マナー、応急処置の仕方、地図読み、気象に関する知識を得る。このようなステップで本書を活用すれば、指導者のみならず、山を志す全ての者の山行がより豊かで安全なものになるだろう。特に第2部の前半部分は、我が国の登山の歴史や自然について触れられているので、山を志す全ての者にお勧めしたい。

一方で、第1部の内容のうち、一

部は医師向けに書かれている薬の処方方法や研修会の運営方法など、一般の登山者には実践し得ないものも含まれているので、それぞれ

の興味や関心、必要に応じて、活用していくことをお勧めする。

(床田真理)



令和4年度第5回(9月度)理事会

議事録

日時 令和4年9月14(水) 19時00分

場所 分)

集会室およびオンライン(Zoom)

【出席者】古野会長、坂井・橋本各

副会長、南久松常務理事、松

原・松田・清水・飯田・久

保田・平川・川瀬・長島各

理事、黒川・佐野各幹事

【欠席者】山本副会長、柏・萩原各

常任理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・高額寄附金の受入れ(ゴールドウィン)を承認した。南久松(賛

成12 反対0)

2・内閣府への公益事業内容の変更申請について承認した。南久松(賛成12反対0)

3・平成4年度年次晩餐会の参加費用について承認した。長島(賛成12 反対0)

成12 反対0)

【協議事項】

なし

【報告事項】

1・正会員19名、準会員17名の入会を承認した旨、報告があった。(古野)

2・7月の寄附金7件、36万円、8

月の寄附金16件、82万5000円の受入れ報告があった。(南久松)

3・山の日講演会(実施、千葉市)の実施結果について報告があった(松田)

(松田)

4・支部宿泊施設情報のまとめが完了した旨、報告があった(松田)

5・丸山晚霞記念館後援名義使用許可をした旨、報告があった(柏)

6・国土地理院WGから支部へ情報提供の協力依頼をする旨、報告があった(長島)

7・創立120周年記念事業募金の入金状況について報告があった(坂井)

8・ヒマラヤキャンプ出発について報告があった(柏)

9・「山」9月号の発行に関する報告があった。(節田)

10・山の日講演会(実施、千葉市)の実施結果について報告があった(松田)

11・支部宿泊施設情報のまとめが完了した旨、報告があった(松田)

12・丸山晚霞記念館後援名義使用許可をした旨、報告があった(柏)

13・国土地理院WGから支部へ情報提供の協力依頼をする旨、報告があった(長島)

14・創立120周年記念事業募金の入金状況について報告があった(坂井)

15・ヒマラヤキャンプ出発について報告があった(柏)

16・「山」9月号の発行に関する報告があった。(節田)

ルーム日誌 9月

1日 YOUTH CLUB

3日 総務委員会(新入会員オリエンテーション)

6日 山岳編集委員会 スケッチクラブ

7日 山行委員会 山岳古道PT

8日 総務委員会 九五会

9日 図書委員会 自然保護委員

会

13日 財務委員会 フォトクラブ

14日	理事会 休山会
15日	記念事業委員会 みちのり山の会
16日	記念事業委員会
17日	アルピニズムクラブ
20日	会報編集委員会 フォトクラブ 沢登り同好会Ⅱ
21日	三水会 つくも会 かつぱの会
22日	山遊会
28日	家族登山普及委員会 資料映像委員会
30日	「山の日」事業委員会 平日クラブ 9月来室者 156名

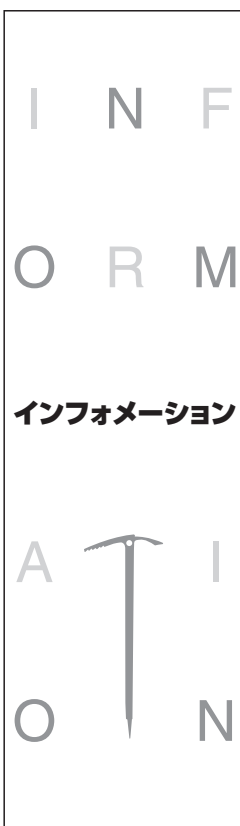
会員異動

物故

渡辺文明(5666)	21・7・8
酒巻吟一(5973)	22・5・27
青木一夫(6310)	22・8・18
藤本眞弓(11570)	22・9・27
大口善朗(11617)	22・7・22
木本義雄(12019)	22・9・23
笠原志郎(14593)	22・9・18

退会

田原富三男(13891)	信濃
菊嶋 正(14203)	
川島由夫(14434)	
桑野あさひ(16137)	



インフォメーション

◆国際山岳年プラス20 シンポジウムin黒部「我ら皆、山の民―現在と未来―」

全国山の日協議会

全国山の日協議会は、国民の祝日「山の日」を周知する活動の一環として、国際山岳年20周年目の本年12月10・11日に、富山県黒部市において表記のシンポジウムを開催します。

目的 (1)国民の祝日「山の日」の周知活動の一環として、日本や外国の研究者そして地域で活動する人々とともに、大きく変化する山や自然、また地球が抱える課題を理解し、この20年間の変化と現状を整理し、持続可能な成長について考える機会とします。

(2)今後全国山の日協議会が、国民の祝日「山の日」の広範な周知の一環として「国際

山の日」の取り組みを行ない、日本での浸透を図る第一歩を始めることを、富山県黒部市で宣言します。

(3)「山の日」の周知に必要な基盤となる「山岳基本法」(仮称)制定準備へのキックオフとします。

(4)今回の国際シンポジウムの成果を富山県、そして黒部市から全国、そして世界に発信することで、地域の皆さまに積極的な意味をもたらします。

期日 12月10日(土)・11日(日)

会場 富山県黒部市宇奈月 黒部市芸術創造センター「セレン」/オンライン併用

主催 一般財団法人全国山の日協議会

特別協賛 一般社団法人立山黒部ジオパーク協会、一般社団法人黒部川扇状地研究所

後援(予定) 国連、国連大学、環境省、林野庁、国土交通省、警察庁、消防庁、文部科学省、スポーツ庁、観光庁、自治体、山岳団体・自然環境保護団体など各種団体、大学など教育機関、マスコミ

協賛 企業、団体
プログラム(予定)

《12月10日》

・主催者挨拶Ⅱ会長・谷垣禎一(ビデオ)

・来賓挨拶Ⅱ官公庁、自治体、一般社団法人、立山黒部ジオパーク協会・中尾哲雄会長

・講演(1)「アイデアラエフ教授(キルギス国立大学長・大統領環境顧問)

・セッション1 山岳地域の災害とその復興

・セッション2 山小屋と登山道の課題と取り組み

・セッション3 山岳地域の自然資源の保護と課題

《12月11日》

・講演(2)「ヘルマン・クロイツマン名誉教授(ベルリン自由大学)

・セッション4 山岳ジオ

寄附金および助成金などの受入報告(9月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
安井 康夫 会員	30	山研運営費用寄付
中山 茂樹 会員	50	東海支部マナスルファスト マウンテンアリング登山 隊支援
中山 茂樹 会員	50	広島支部アマ・ダブルム 登山隊支援
旧HAT-J 多摩支部	250	自然環境保護資金寄付
堀 義博 会員	50	岐阜支部50周年記念 事業寄付
竹中 佳美 会員	50	岐阜支部50周年記念 事業寄付
東明 裕 会員	50	岐阜支部50周年記念 事業寄付
梅田 直美 会員	20	岐阜支部50周年記念 事業寄付
丹羽 邦夫 会員	10	岐阜支部50周年記念 事業寄付
後藤 充 会員	20	岐阜支部50周年記念 事業寄付
(株)ゴールドウイン	50	房総の山復興 プロジェクト寄付金
重廣 恒夫 会員	1,000	グレートヒマラヤ トラバース隊寄附金

◆日帰りアルプスシリーズ第3回
相州アルプス山行のご案内

山行委員会

丹沢山塊の東方、仏果山(747m)をはじめとしたピーク群が相州アルプスです。荻野高取山から華厳山、弘法大師が経文を収めた

パークの現状と課題

・セクション5 山岳地域の観光利用の課題総合討論(クロージングセクション)

*各セクションの内容詳細については、各コーディネーターと打合せ中)
・主催者による総括

と言われる巨石「経石」のある経ヶ岳、宮ヶ瀬湖や丹沢山塊を眺めながら仏果山、半原高取山までロングルートを歩きます。

日程 11月23日(水)

集合 小田急線本厚木駅改札 8時30分集合、8時50分発半

行程 原行きバスに乗ります。

本厚木駅⇨上萩野車庫バス

停⇨高取山⇨華厳山⇨経ヶ岳⇨仏果山⇨高取山⇨ふれ

あいの村⇨本厚木駅

歩行 6時間30分

装備 一般登山装備

解散 本厚木駅 17時30分予定

費用 10000円(傷害保険料、通

信費など)。当日集金(集合

場所、解散場所までの往復交通費・バス代は含まず)

定員 10名

申込み 11月5日までに

☒sanko@jac.or.jp

山行委員・杉崎敬子あて。

傷害保険加入のため、氏名

性別、生年月日をお知らせ

ください。また、参加者名簿作成のため、会員番号、住所、電話番号、携帯番号、緊

急連絡先電話番号などをお

知らせください。

問合せ先 山行委員会・杉崎敬子

☒sanko@jac.or.jp

TEL 090-11996-4110

◆「日本人のエベレスト登山」展

富山支部

1970年5月11日、日本人が初めて世界最高峰エベレストに登頂して50年。その歴史を振り返る写真展を東京都板橋区、兵庫県豊岡市などで開催してきました。今回は富山県立山カルデラ砂防博物館とともに巡回展を開催中で、2019年に富山県人として初めてエベレスト登頂を果たした佐伯知彦氏などを招き、左記のような特

別講演会を開催します。

日時 11月3日(木) 13~15時

場所 富山県立山カルデラ砂防博物館大型映像ホール

講師 佐伯知彦氏(立山ガイド協会)

会) 神長幹雄氏(日本山岳

会)

問合せ先 立山カルデラ砂防博物館

館

TEL 076-481-1160

*申込み不要、閲覧無料です。

◆スキー懇親会のお知らせ

山行委員会

令和5年1月のスキー懇親会は

パルコール婦恋スキー場で開催いたします。

日程 令和5年1月24日(火)~27日

(金)

費用 3万円 通信費、保険料、

宿泊懇親会費用などを含む

宿泊 婦恋の宿・あいさい

定員 15名

現地集合・現地解散

申込み 12月20日までに、会員番

号、住所、氏名、電話など

を明記し、郵送、FAX、

メールで高橋聡まで。

〒102-0072 東京都

千代田区飯田橋2-12-10

FAX 03-3222-0908

✉ sanko@jac.or.jp

*参加申込み者には詳細案内をお送りいたします。

◆第10回小島烏水祭(広島・山陰・四国3支部交流会併催)のご案内

主催 本部、主管 四国支部

期日 11月19日(土)～20日(日)

内容 19日 ①峰山公園で讃岐うどんの接待(11時30分～13時) ②顕彰碑前で碑前祭(13時30分～15時) ③栗林公園、史跡高松城跡の見学(15時～17時30分) ④喜代美山莊花樹海にて懇親会(18時～20時)

20日 ハイキング 屋島登山口8時30分～旧ケールカー駅跡(駐車場有)―南嶺冠ヶ嶽―古代の屋嶋城跡―北嶺・遊鶴亭―登山口―12時過ぎ「わら家」で昼食、13時30分ごろ解散

参加費 碑前祭は無料、懇親会費は8000円、宿泊費は別途

予約・問合せ

森山 四国支部事務局・TEL 090-4971-1001

✉ d8gw7un9@384.jp

小島烏水祭担当役員・向井

TEL 090-9554-6193

*コロナ禍のため、内容は変更する可能性があります。ご了解ください。

◆山と画家の出会い 「人生を変えた絶景」展

丸山晚霞記念館

標高3000m級の山々が連なる北アルプス。天空の世界に広がる絶景は、まさに人生が変わるような光景。その魅力に取りつかれた5人の画家、丸山晚霞、武井清、千葉潔、上田太郎、春原直人が描いた山岳絵画の展覧会です。

会場 丸山晚霞記念館 〒389-0515 長野県東御市

常田505-1 東御市文化会館併設

TEL 0268-62-3700

FAX 0268-62-3262

会期 10月29日(土)～12月25日(日)

9時～17時

休館 月曜、11月29日

訂正

*2022年8月25日付で古川史典会員(15546)より出された

会員番号変更願ひについてはこれを認めることとし、9月21日付で初回入会時の会員番号8317に変更します。これに伴い15546は欠番とします。

総務担当常務理事 柏澄子

*先ごろ刊行された『山岳』2022年版(第百十七年)の「支部の活動報告」中、岩手支部の項4行目「200名もの会員獲得」は「20名もの会員獲得」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

岩手支部事務局 高橋勇一

*会報9月号18ページ2段目、東京多摩支部自然保護委員会主催の「一般および会員向け自然保護講演会参加者募集」告知記事中、【2】奥多摩の自然を守ろう―東京都レンジャーの話―は昨年(2021年)に行なった講演会を誤って掲載してしまいました。本年、この講演会はありません。謹んでお詫び申し上げます。

東京多摩支部 自然保護委員会



◆編集後記◆

●10月1日、JR只見線が11年ぶりに全線開通しました。2011年の新潟・福島豪雨により只見駅(会津川口駅間が不通になっていたものですが、日本を代表するローカル線の復活は、大変喜ばしいことです。沿線には大志集落や夢幻峡の渡し、第一只見川橋梁、宮下三兄(橋)弟など見所が多く、鉄道ファンの人気も高い路線。

●もちろん山といで湯が楽しめるのも只見線の魅力。浅草岳に始まって蒲生岳、本名御神楽岳、志津倉山などの登山と併せて、湯倉や玉梨、八町、早戸、宮下など、素朴な山峡のいで湯も楽しむことができます。現地はこれから深い雪に埋めれますので、来春の新緑のころ、本会報でも採り上げたいと思います。

(節田重彰)

日本山岳会会報 山 929号

2022年(令和4年)10月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイッツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重彰
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社